

## 令和五年度 三学期始業式 校長講話

島根県立安来高等学校 校長 中西正実

まずもって、元日に発生した令和六年能登半島地震によって、お亡くなりになられた方々へ哀悼の意を表しますとともに、お怪我をされた方々、被災された方々に心よりお見舞いを申し上げます。

その上で、三学期の始業にあたって、今日、私からは、「数え年」と、なぜ「正月はめでたいのか」ということについて、お話をしたいと思います。

まず、「数え年」というものについて、皆さんは、知っていますでしょうか？

日本では、戦前の昭和二十年頃までは、この数え年が、広く一般的に使用されていましたが、戦後になって国際的な満年齢の考え方に統一されることになったとのことです。

具体的に、高校3年生を例にとってみると、多くの人は、平成17年生まれだと思いますが、2024年で考えると、誕生日が来る前は18歳であるところ、数え年では、20歳になります。ちなみに、お隣の韓国では、つい最近まで、この数え年が適用されていて、昨年2023年6月に法改正がされ、満年齢に統一されたとのことです。

この考え方は、次のとおりです。満年齢では、生まれた時は、みな0歳で、次の誕生日を迎えると1歳になります。一方で、数え年の考え方は、生まれたときは、みな1歳で、次に迎える1月1日、お正月になると、2歳になるという考え方です。このように、数え年では、日本中の人がお正月に一斉に歳を一つとる、というところが重要となってきます。

つまり、その昔、お正月は、みんなの誕生日だった、ということになるわけです。ですので、新しい年を迎えるにあたって、家をきれいにし、玄関を門松やしめ縄で飾って、神様を迎えると共に、一年を無事に生活できたことに感謝して、めでたく歳を一つとれたことを、祝った事から、年が「明けましておめでとう」だと言われています。

この事から、今一度、考え直すことは、今の当たり前は、その昔は、当たり前ではなかっただろう、ということです。今では、情報通信技術が発達して、携帯電話のみならず、身の回りの家電にも、インターネットが活用されるなど、スイッチに触れるだけ、というのはもちろん、中には、言葉で話しかけたり、スマホなどで遠隔で操作することで、部屋の明かりをつけたり、エアコンを作動させたり、お風呂のお湯を入れることができる、そのような時代にもなっています。

その昔、家電の「三種の神器（じんぎ）」と呼ばれた、洗濯機、冷蔵庫、白黒テレビが普及され始めたのは、1950年代（昭和三十年代）頃ですが、まさに、戦前やそれ以前では、部屋に明かりを灯す、ご飯を炊く、お風呂を沸かす、買い物をする、病院で診察を受ける、などの一つ一つが、今とは、比較にならないほどの、時間とエネルギーが必要だったことは容易に想像がつかます。

当然に、現代の豊かさも百年後の未来の人から見ると、簡素で粗末な生活に見えてしまうかも知れないように、今では不便に思えてしまう生活も、その時代、その時代の幸せや豊かさがあったことと思います。だから、余計に今よりも、健康に生活して、生きていくことのありがたさを、昔は、より感じることができたのだと思います。

冒頭に触れた地震の被害もそうですが、今、海外に目を向けると、貧困や災害、国際紛争で、温かいベッドで寝たり、温かい夕食を食べたり、灯りの下で本を読んだり、音楽を聴いたりという、我々にとって、ごく当たり前の生活が、十分にできない、当たり前の権利が、当たり前に行使できない状況にある人々のことが、メディア等で取り上げられています。

このようなことを踏まえて、新年にあたって、我々が、普段、あまりに当たり前過ぎて、そのありがたさを見失いかけていることを振り返り、今一度、かつての生活や、災害や紛争に見舞われている方々へ、思いを傾けつつ、今の生活への感謝の気持ちを新たにするとともに、明るい光の下で学びに向き合えることと、自分の持てる力を、その気になれば社会に還元できることを再認識したいと思います。

そして、我々の力を、どのように人々や社会に役立てることができるのかを考え、目の前の自分がすべきことに注力できることのかげがえの無さについて、お互いに見つめ直す機会としたいと思います。

今日は、「数え年」の話題に触れ、身の回りの当たり前への感謝と我々がすべきこと、できることについて、考えることのお話をしました。

では、皆さん、2024年を、お互いに意義のある一年にできるよう、しっかりと取り組んでいきましょう。私からは、以上です。